

胆嚢捻転症の一手術例

成富 一哉 二見喜太郎 高山 成吉
永川 祐二 田中 千晶 平野 憲二
田村 智章 有馬 純孝

福岡大学筑紫病院外科

要旨：胆嚢捻転症は比較的稀な疾患で特異症状を欠くため、術前診断は困難であるとされている。我々は胆嚢捻転症の一例を経験したので報告する。症例はやせ型、老人性亀背を有した85歳の女性で突然の腹痛と下痢で発症、近医にてイレウスの診断で2週間の入院治療を受けるも症状増悪したため、当科紹介された。入院時体温37.5℃、腹部は膨隆し臍右側に手拳大の腫瘤触知、同部に著明な圧痛と筋性防御を認め、血液所見では肝胆道系酵素の上昇を認めた。画像所見上、胆嚢は著明に腫大しており、急性胆嚢炎と診断したが、超音波所見にて胆嚢は肝床部より遊離していたため、胆嚢捻転を疑い、経皮経肝ドレナージは不能と診断し緊急手術を行った。胆嚢は腫大し黒褐色を呈し、頸部で360度反時計方向に捻転しており、胆嚢捻転症による壊死性胆嚢炎と診断し、胆嚢摘出術を行った。本症例では術前診断をなしえなかったが、本疾患の概念が念頭にあれば、術前診断は可能であったと考えられた。

索引用語：胆嚢捻転症，壊死性胆嚢炎，胆嚢摘出術